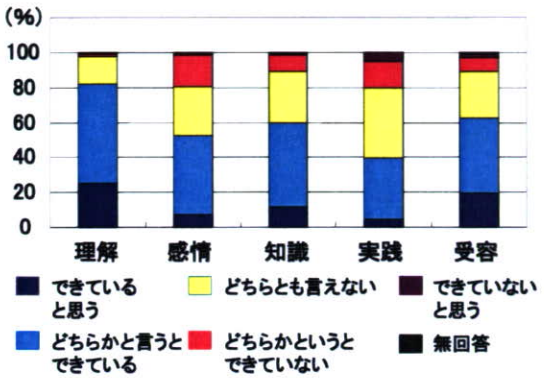
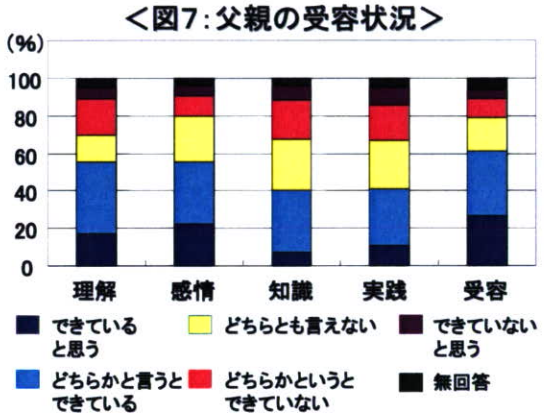
感情的な受け止め方や発達特性に適した対応の実践の達成度が低くかった（図 8）。なお、診断を知らない兄弟については

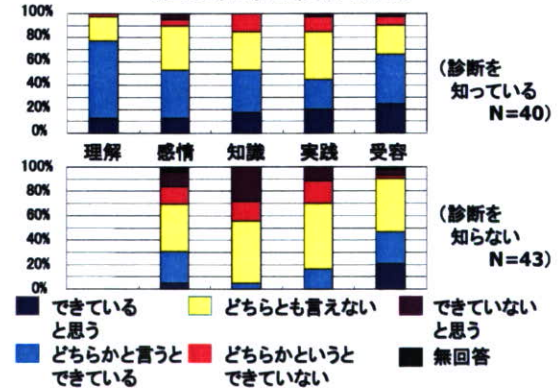
<図6:母親の受容状況>



<図7:父親の受容状況>



<図8:兄弟の受容状況>



D．考察

永井ら（2004）は広汎性発達障害の場合、親が障害に気づくのは子どもが 1 歳半～2 歳未満がピークであり、障害告知を受けるのは 3 歳～3 歳 5 ヶ月がピークで、親は障害の気づきから告知後までが最もつらく精神的な不安定さを訴えていると報告しているが、今回の調査でも親が最初に子どもの発達の問題に気づく平均月齢は 26.1 ヶ月で年代としては 18 ヶ月から 36 ヶ月未満と似た結果となった。しかし実際には 18 ヶ月未満の時期から既に何らかの発達の問題に気づいていたという親も少なからずおり、広汎性発達障害の早期徴候の研究に発展する可能性が考えられた。また今回の調査では初めて診断を受けた平均月齢は 67.0 ヶ月と遅く、最初の気づきからの期間としては平均して 41.0 ヶ月もの歳月が過ぎていた。永井らの報告にもあるようにこの期間は親の心情としては不安が高く最もつらい時期であると推察される。またこの間に専門機関に相談をしていたものの、そこでは具体的な話もなく経過を観察することになったり問題なしといわれてしまったなどの不満の声も聞かれた。診療者としては親の相談に十分耳を傾け、診察の結果と今後の方針や見通しを分かりやすく明確に伝える必要があると考えられた。また、多くの親が早期診断に賛成と答えているものの、診断だけではなくその後の療育や支援の充実もあわせて望む声が多く、今後の重要な課題であると思われた。

現在の受容については母親としては分かっているものの感情的には十分受け止めきれなかったり適した養育や対応を実践しているかどうかについては自信がない様子だった。また父親については感情的な受け止めやありのままの受容については比較的良い評価を得ているものの、その他の項目では受容しているとは思えないという回答の割合が母親よりも高くなり、両親の受容に差があることが分かった。高橋（2002）は障害告知の際には両親がそろって受診し、その後の子育

てを支えあい心を合わせてスタートすることを勧めているが、家庭での共通認識や協力体制の構築において大切な事柄であるように思われる。また兄弟の受容状況については診断を話していない場合の受容の悪さが目立つ結果となり、診断の説明の大切さを示唆する結果となったと思われた。

E. 結論

子どもの発達障害の早期徴候への親の気づきは 2 歳前後に最も多いが 18 ヶ月未満に気づかれることも少なくなかった。しかしその後診断を受けるまでに数年経過してしまうことも多い現状が把握された。また多くの親が早期診断に賛成する一方で、その後のフォローの充実を求める声が多く聞かれた。

今回は当事者の自助団体の会員を対象に調査を行ったが、そのような団体組織に属さない家族では違った結果になることも考えられるので、より詳細な実態把握を行うためには、さらに広範囲に調査を続ける必要があると思われた。

（参考文献）

高橋脩．病名をいつ、どのように告知するか①発達障害臨床の現場から．こころの科学 105. 52-58. 2002

永井洋子，林弥生．広汎性発達障害の診断と告知をめぐる家族支援．発達障害研究 26(3). 143-152. 2004

二木康之．障害をもつ小児の親への告知と受容―望ましい告知とは―．小児科 44(5). 855-860. 2003

F. 健康危険情報

特になし。

G 研究発表

特になし。

論文発表

特になし。

学会発表

特になし。

G. 知的財産権の出願

登録状況、登録ともになし。

厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）
分担研究報告書

（題名）広汎性発達障害児とその周囲への診断告知状況調査

分担研究者：宮地泰士

研究要旨

広汎性発達障害児本人とその周囲の人達への診断告知の実態と当事者家族の診断告知に関する思いを母親が記入する質問紙によって調査した。

対象は広汎性発達障害の当事者団体の会員家族で、119名（男児103名、女児16名）から回答を得た。子どもの調査時平均年齢は12.4歳（小学生67名、中学生26名、高校生15名、大学・専門学校生6名、社会人5名）であった。

調査時既に子ども本人に診断告知をしていると答えたのは全体の31.1%で、それ以外の62.2%が今後診断告知をするつもりであると回答した。また子ども本人に診断告知をすべきだと思うかという問いに対しては73.9%がすべきと回答した。しかし一方では診断名だけが一人歩きしてしまうことを懸念したり、診断名よりも特徴を分かりやすく説明することを優先する意見もあった。

周囲の者達への診断告知については父親および担任については9割以上が診断を告げていると回答した。しかし兄弟については診断告知が3割程度となり、クラスメートについては8割弱が診断告知をしていないと回答した。

今回の調査の結果により、多くの者が子ども本人に発達特性についての説明をすることを支持しているが、実際の場面では様々な意見や葛藤があることが分かった。今後は子ども本人の自己理解を深めるプログラムや、兄弟やクラスメートなどの周囲の子ども達の理解を深めるプログラムの充実が望まれる。

A．研究目的

広汎性発達障害（以下PDD）児やその家族の支援を行っていくうえで、子ども本人やその周囲の者達への障害診断告知は大変重要な課題である。子ども本人にとって自己理解を深めることは社会不適応の原因を整理し誤った自己評価の低下を防ぎ社会適応に必要なスキルを習得するためには大変重要であり、周囲の者への子どもの障害診断告知は正しい理解と支援を促すきっかけともなる。しかしその一方で告知が適切な形で行われないと、本人自身が自己嫌悪に陥ったり、周囲の者から差別や偏見で見られてしまう危険性も伴っている。したがって障害診断告知によるメリットが知られる一方で告知の是非やどのように告知すべきかといった議論が続いているのが現状である。

最近では本人やその周囲の者達への障害診断告知についての報告も散見されるようになってきたものの（相川ら2005、グレイら2007、

東条 2005）、その方法やあり方は非常に個別性が高く、実態把握を行った報告はほとんどない。そこで今回我々は、現在の障害診断告知の実態を把握することを目的として PDD 児本人やその周囲の者達への障害診断告知の状況を質問紙により調査した。

B．研究方法

広汎性発達障害の当事者団体であるアスペ・エルデの会（NPO 法人：会員約 200 家族）の会員家族（母親）を対象に質問紙による調査を行った。

質問内容は子ども本人やその周囲の者への診断告知の状況と、それぞれの診断についての理解度を選択枝から選ぶ質問項目および障害診断告知についての意見を自由記述式で求める項目とによって構成されている。

回答後郵送にて質問紙を回収し、119 名（男児 103 名、女児 16 名）から回答を得た。子どもの調査時平均年齢は 12.4 歳（小学生 67 名、中学生 26 名、高校生 15 名、大学・専門学校生 6 名、社会人 5 名）であった。小学生のうち 71.6%は通常学級に在籍し、特別支援学級に在籍している児は 20.8%だった。養護学校に在籍している児は 0 名だった。中学生のうち 46.2%は通常学級に在籍し、特別支援学級に在籍してる児は 42.3%、養護学校に在籍している児は 11.5%だった。高校生で養護学校に在籍している児は 33.3%だった。また大学や専門学校に通っている者が 6 名、既に就職を果たしている者が 5 名いた。

倫理面への配慮

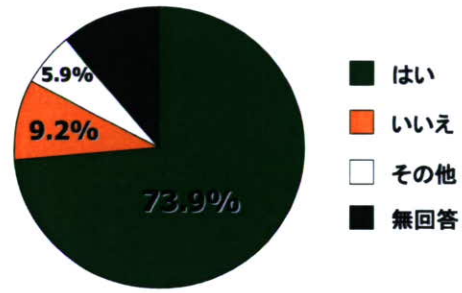
今回の調査研究の目的を文書により説明し同意を得たうえで質問紙への記入を求めた。

C．研究結果

（本人への告知について）

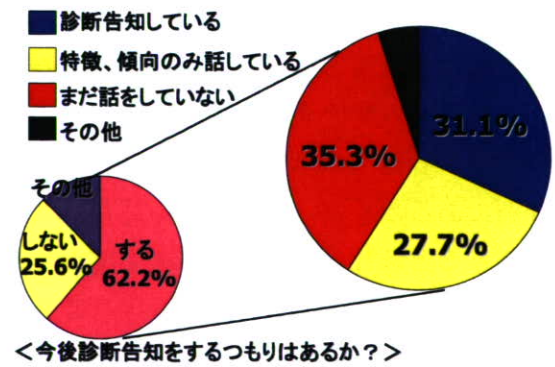
子ども本人に診断告知をすべきだと思うかという問いに対しては 88 名の 73.9%がすべきと回答した（図 1）。

<図1：本人への診断告知について>



調査時既に子ども本人に診断告知をしていると答えたのは 37 名と全体の 31.1%で、診断名は伝えずその特徴や傾向のみ伝えていると回答したものが 33 名（27.7%）、まだ何も話していないと答えたのが 42 名（35.3%）だった。また診断告知を既にしたと答えた 37 名以外の 62.2%が今後診断告知をするつもりであると回答した（図 2）。

<図2：本人への診断告知状況>



診断告知をした年齢については小学校高学年以上の時期との答えが多かった。告知する

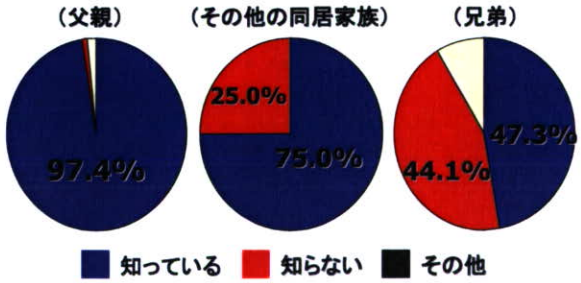
きっかけとなったことについては子ども自身が自分について気にするようになったことや集団生活でのトラブルなどがきっかけになったという回答もあったが、親が読んでいた本を見て「僕はこれなの？」と尋ねてきたり、テレビなどを見て自分もそうなのかと尋ねきたことが告知のきっかけとなったという答えもあった。既に告知をしていると答えた者に実際に告知してみてどうだったかと尋ねたところ、親としては本人への指導や話がしやすくなったという意見など肯定的な感想が聞かれた。子どもにとっては自分なりに社会適応のためのスキル習得に意欲的になったという者もいたが、よく分からないという回答が多かった。

また告知する人としては家族が最も多く、医学的な内容や予後予測など専門家が家族と協力して告知を行うことを求める意見も多かった。

（周囲の者達への診断告知状況について）

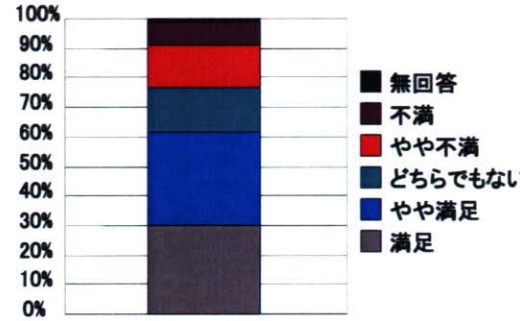
同居家族への診断告知の状況については、父親は 97.4%、兄弟の 47.3%、祖父母などのその他の同居家族は 75.0%が診断名を知っていた（図 3）。

＜図3：家族の診断名についての認知＞

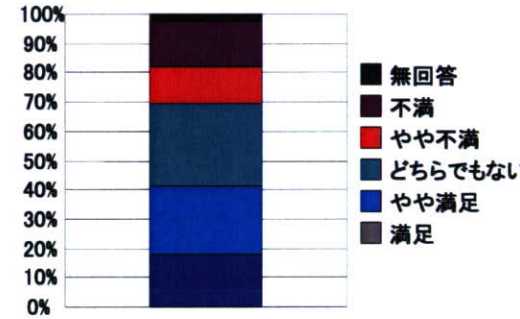


それぞれの診断理解に対する母親の満足度については、父親については 61.6%がほぼ満足していると回答を得た（図 4）が、祖父母などの同居家族については 41.0%だった（図 5）。ま

＜図4：父親の理解＞

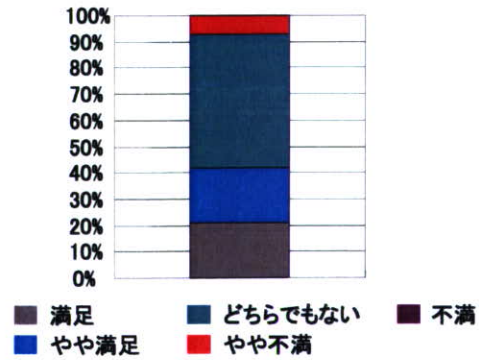


＜図5：その他の同居家族の理解＞



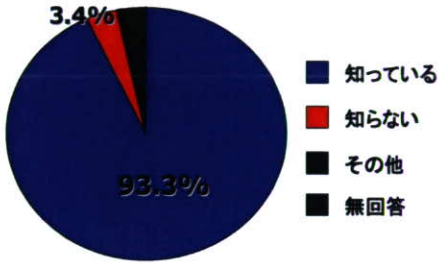
た兄弟については診断について話をしていると答えた 44 名については 41.8%がほぼ満足していると回答していた（図 6）。

＜図6：兄弟の理解＞

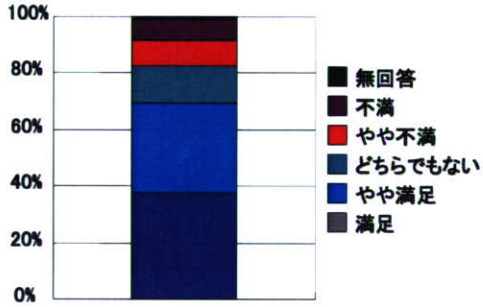


学校の担任については 93.3%が診断名について知っているようで（図 7）、その理解の程度については 70.2%の母親がほぼ満足と回答した

<図7:担任の診断名についての認知>

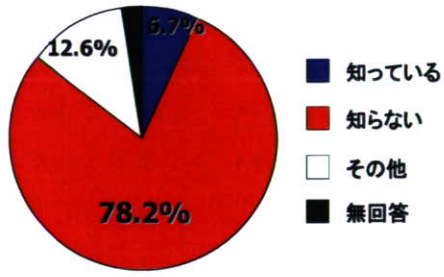


<図8:担任の理解>

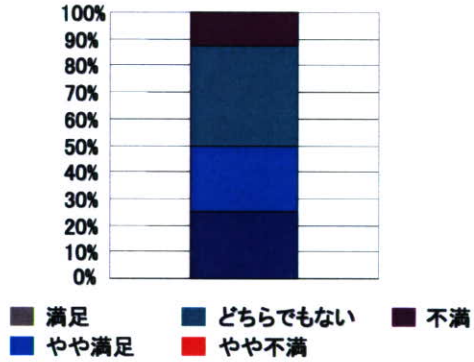


（図 8）。しかしクラスメートなど子どもと同年代の友達についてはどうかというと、78.2%が診断名について話をしていないと答え、話をしていると答えたのは 6.7%だった（図 9）。友達の診断に対する理解の程度については、話をしていると答えた 8 名については 50.0%がほぼ満足していると答えたものの不満と答えた者も 12.5%いた（図 10）。

<図9:友達の診断名についての認知>



<図10:友達の理解>



D．考察

本人への診断告知については実際に行っているのは 3 割程度と少なく、診断名は言わずに特徴や傾向についてのみ話をしていると答えた者も少なからずいた。診断告知そのものへの意見を求めた際にも、診断告知により診断名だけが一人歩きしてしまうことを懸念してしまうという意見や、診断名よりも特徴を分かりやすく説明することの方が大切であるとする意見もあったことから、多くの親が診断告知に対して肯定的に考えているものの、単純に診断名を告知するのではなく子ども本人にとって有用な情報をいかに分かりやすく説明するかを追求することが大切で、そのあり方については様々な意見があり、今後も議

論を深めていく必要があると思われた。

広汎性発達障害児本人への診断告知のあり方について吉田（2004）は、1 具体的な困難に対応する技術を持つ段階、2 自分の特性に名前がつくと知る段階、3 情報を主体的に活用してみる段階、4 他の自閉症スペクトラム（広汎性発達障害）の子どもを知る段階、5 改めて自分を肯定的に捉え直す段階の５つのステップに区分し、一人ひとりの子どもや親、利用できる社会資源や地域社会の発達障害への理解度などの条件を検討しながら支援していく必要があることを報告している。今回の調査でも、いきなり診断名を告げるのではなく、その前から様々なエピソードを通じて子どもに自分の特性やトラブルへの対処方法などを伝えるといった準備段階が必要であると思うという意見や、一回の説明で終了するものではないので継続した支援が大切であるという意見、診断名について悪いイメージではなく肯定的に捉えていけるように配慮したいという意見などがあり、吉田の考えと同様の主張も見受けられた。

子どもに関わる周囲の者達への診断名告知状況としては、同居家族や担任教師など子どもに身近に関わる大人への告知は割合が高いのに対して、子ども年代になると、兄弟であっても診断名告知の割合は半数以下となり、クラスメートに至ってはほとんどが診断名を話していないと答えた。このことから子ども達が発達障害の特性を正しく理解するための説明に多くの者が困難さを感じ、躊躇している現状が窺えた。また実際に診断名を告知してもその理解の程度に対する母親の満足度ついては同居家族でも決して高い評価ではなく、母親と子どもが孤立した状況の中で苦労しているケースも少なくないと予想される。学校の担任についてはその理解の程度に対する母親の満足度が約 7 割と比較的高い評価を得たが、これは特別支援教育など教育界において発達障害児への理解や対応への認識が高まってきている傾向が反映された結果であろうと思われた。しかしその一方でクラスメートなどの子どもの友達の理解の程度への満足度については先述の告知の仕方とあわせて今後の課題と思われた。

E. 結論

広汎性発達障害の当事者団体家族の協力を得て、本人およびその周囲の者への診断名告知の現状調査を行った。多くの親が診断告知に対して肯定的に考えているものの、具体的にどのように行うのかについては議論の余地が残った。また周囲の者への診断名告知については家族や担任などの大人へは過半数が説明していると答えたものの兄弟やクラスメートなど子どもの友達には診断名を説明していないと答えた者が多かった。

これらの現状を踏まえて診断名告知のプログラムの開発や本人や周囲の者の正しい理解を深めるポイントなどについて今後も調査や関係者間での意見交換などを行っていく必要があると思われた。また、今回は当事者の自助団体の会員を対象に調査を行ったが、そのような団体組織に属さない家族では違った結果になることも考えられるので、より詳細な実態把握を行うためには、さらに広範囲に調査を続ける必要があると思われた。

（参考文献）

１相川恵子、仁平義明著．子どもに障害をどう説明するか．ブレーン出版　2005
２キャロル・グレイとグレイセンタースタッ

フ著　腹巻智子監訳・編著．自分について．ASD ヴィレッジ出版　2007
３東条恵著．アスペルガー症候群・自閉症のあなたへ．考古堂書店　2005
４吉田友子．高機能自閉症スペクトラムを持つ子どもへの医学的心理学教育―診断名告知の位置づけとその実際―．発達障害研究．26(3). 174-184. 2004

F.　健康危険情報
特になし。

G　研究発表

（学会発表）
Taishi Miyachi, Misato Kamiya, Yuka Yoshihashi, Masatsugu Tsujii. How do families face the disclosure of an autism diagnosis? A pilot survey among families of children with autism spectrum disorder. The 7th Annual International Meeting for Autism Research 2008. London May 15-17. 2008
宮地泰士、神谷美里、野村佳代、吉橋由香、辻井正次．広汎性発達障害児とその周囲への診断告知実態調査．第99回日本小児精神神経学会．米子．6月 13－14. 2008

H.　知的財産権の出願
登録状況、登録ともになし。

Ⅲ．研究成果の刊行に関する一覧表

業 績

辻井正次

Anitha A, Nakamura K, Yamada K, Suda S, Thanseem I, **Tsujii M**, Iwayama Y, Hattori E, Toyota T, Miyachi T, Iwata Y, Suzuki K, Matsuzaki H, Kawai M, Sekine Y, Tsuchiya K, Sugihara GI, Ouchi Y, Sugiyama T, Koizumi K, Higashida H, Takei N, Yoshikawa T, Mori N. Genetic analyses of Roundabout (ROBO) axon guidance receptors in autism. Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet. 2008 Feb 12;

Toyoda T, Nakamura K, Yamada K, Thanseem I, Anitha A, Suda S, **Tsujii M**, Iwayama Y, Hattori E, Toyota T, Miyachi T, Iwata Y, Suzuki K, Matsuzaki H, Kawai M, Sekine Y, Tsuchiya K, Sugihara G, Ouchi Y, Sugiyama T, Takei N, Yoshikawa T, Mori N. SNP analyses of growth factor genes EGF, TGFbeta-1, and HGF reveal haplotypic association of EGF with autism.. Biochem Biophys Res Commun. 2007 Sep 7;360(4):715-20.

Tsuchiya KJ, Hashimoto K, Iwata Y, **Tsujii M**, Sekine Y, Sugihara G, Matsuzaki H, Suda S, Kawai M, Nakamura K, Minabe Y, Yagi A, Iyo M, Takei N, Mori N. Decreased serum levels of platelet-endothelial adhesion molecule (PECAM-1) in subjects with high-functioning autism: a negative correlation with head circumference at birth.. Biol Psychiatry. 2007 Nov 1;62(9):1056-8.

Nishimura K, Nakamura K, Anitha A, Yamada K, **Tsujii M**, Iwayama Y, Hattori E, Toyota T, Takei N, Miyachi T, Iwata Y, Suzuki K, Matsuzaki H, Kawai M, Sekine Y, Tsuchiya K, Sugihara G, Suda S, Ouchi Y, Sugiyama T, Yoshikawa T, Mori N. Genetic analyses of the brain-derived neurotrophic factor (BDNF) gene in autism. Biochem Biophys Res Commun. 2007 Apr 27;356(1):200-6.

Miyahara M, Bray A, **Tsujii** M, Fujita C, Sugiyama T. Reaction time of facial affect recognition in Asperger's disorder for cartoon and real, static and moving faces. Child Psychiatry Hum Dev. 2007 Aug;38(2):121-34.

Suzuki K, Hashimoto K, Iwata Y, Nakamura K, **Tsujii M**, Tsuchiya KJ, Sekine Y, Suda S, Sugihara G, Matsuzaki H, Sugiyama T, Kawai M, Minabe Y, Takei N, Mori N. Decreased serum levels of epidermal growth factor in adult subjects with high-functioning autism. Biol Psychiatry. 2007 Aug 1;62(3):267-9.

神谷美里・**辻井正次**・石川道子　高機能広汎性発達障害女子のグループ活動の試み. 小児の精神と神経 47, 115-122. 2007

神谷美里・吉橋由香・宮地泰士・**辻井正次**　広汎性発達障害の行動・情緒的特性の性差－Child

Behavior Checklist/4-18による検討、精神医学:49(10), 1021-1026. 2007

明翫光宜・辻井正次　高機能広汎性発達障害と統合失調症におけるロールシャッハ反応の特徴--反応様式の質的検討　ロールシャッハ法研究 11,1～12,2007

吉橋由香, 宮地泰士, 神谷美里, 永田雅子, 辻井正次　高機能広汎性発達障害児を対象とした「怒りのコントロール」プログラム作成の試み.: 小児の精神と神経 48(1): 59-69. 2008

田倉さやか・辻井正次　発達障害児のきょうだいに対する自己理解・障害理解プログラムの試み－海洋体験を中心とした合宿を通して－　中京大学現代社会学部紀要第 1 巻 1 号; 45-58, 2007

宮地泰士, 辻井正次　協調運動の発達と発達性協調運動障害(DCD).: 総合リハビリテーション 36(2): 141～145 (2008)

宮地泰士, 辻井正次　自閉症スペクトラムの早期診断.: 脳21 10(3): 228-231 (2007)

土屋賢治, 稲田尚子, 神尾陽子, 黒田美保, 八木敦子, 松本かおり, 宮地泰士, 河合正好, 中村和彦, 武井教使, 辻井正次, 森則夫　自閉症とその関連疾患の診断尺度-ADI-R と ADOS-G について-.: 脳21 10(3): 223-227 (2007)

神谷美里・宮地泰士・吉橋由香・辻井正次　感情理解および感情のコントールプログラムの開発. 脳２１:10(23), 232-236. 2007

豊田佳子、辻井正次　高機能広汎性発達障害をもつ子どもたちへのグループ・アプローチ　臨床精神医学　第36巻5号, 607-610.　2007

辻井正次　子どもの心の支援としてのグループ療法.　母子保健情報　第 55 号　109-113. 2007

明翫光宜、辻井正次　思春期・成人期のアスペルガー症候群.　精神療法　第 33 巻 4 号, 435-440.　2007.

辻井正次、桜井伸二、佐竹創平　広汎性発達障害の３次元動作分析からみた投動作のバリエーション―不器用さに対する支援のために.　中京大学社会部紀要第 21 巻 2 号, 41-54. 2007

辻井正次　発達障害のある人たちの余暇支援から考えること.　心と社会(日本精神衛生会), 第39巻1号, 67-71.

辻井正次(単著)　特別支援教育で始まる楽しい学校生活の創り方―軽度発達障害の子どもたちのために.　河出書房新社.　2007.

Fujita C, and Tsujii M. (Proceeding) Investigation of the Degree of Acquisition of Japanese Kanji Characters and Kana Letters for Children in Ordinary Class in Japanese Elementary Schools. RIKEN BSI and Oxford-Kobe Joint International Symposium: Reading and Dyslexia in Different Languages, 14-19 April 2007, Kobe. 54-55.

井上雅彦

井上雅彦・井澤信三　(2007) 自閉症支援―はじめて担任する先生と親のための特別支援教育―　明治図書

柘植雅義・井上雅彦 (2007) 発達障害の子を育てる家族への支援　金子書房

中村真由美・井上雅彦 (2007) アスペルガー症候群生年へのソーシャルスキルトレーニング　行動分析　大河内浩人，武藤崇編　2007　ミネルヴァ書房　pp152-166

大久保賢一・野呂文行・井上雅彦 (2007) 小学校での宿題提出行動の促進―集団随伴性―　行動分析　大河内浩人，武藤崇編　2007　ミネルヴァ書房　pp152-166

井上雅彦 (2007) 不登校を伴う高機能自閉症児への包括的支援　行動療法を生かした支援の実際　小野昌彦・奥田健次・柘植雅義編　2007　東洋館出版社　pp92-107

福田誠・井上雅彦　(2007) 高機能自閉症児におけるソーシャルストーリーによる行動変容－家庭場面における読み聞かせ効果の検討－. ＬＤ研究. 16. 1. pp84-94.

大久保賢一・井上雅彦 (2007) 通常学級に在籍する発達障害児の他害的行動に対する行動支援--対象児に対する個別的支援と校内支援体制の構築に関する検討　特殊教育学研究 45(1)pp35-48.

大羽沢子・井上雅彦 (2007) 特別支援学級担任の短期研修プログラムの開発と有効性の検討－学習指導場面における教授行動と学習行動の変容－特殊教育学研究 45(2)pp85-96.

高瀬夏代・井上雅彦　(2007) 障害児・者のきょうだい研究の動向と今後の研究の方向性　発達心理臨床研究, 13, pp65-78 (兵庫教育大学　発達心理臨床研究センター)

野村和代・井上雅彦　(2007) 被虐待児とその養育者に対する治療的アプローチについての一考察　発達心理臨床研究, 13, pp79-92 (兵庫教育大学　発達心理臨床研究センター)

宮崎光明・加藤永歳・酒井美江・井上雅彦 (2007) 高機能広汎性発達障害児におけるビリヤードスキルトレーニング－イメージボールを想定するトーレーニングの効果－　発達心理臨床研究, 13, pp93-108 (兵庫教育大学　発達心理臨床研究センター)

Inoue, M (2007) Parent Training Program using Internet for Children with Autism Association for Behavior Analysis ３３th Annual Convention

＜学会発表＞

シンポジウム

井上雅彦　エビデンスに基づいた実践を我が国に定着させるための戦略　学会企画シンポジウム エビデンスに基づいた発達障害支援の最先端　日本行動分析学会第 25 回大会発表論文集 19　立教大学　東京 2007/8/5

井上雅彦

認知行動療法と実証（エビデンス）日本心理学会　第71回大会発表論文集 S11

学会発表

宮崎光明・井上雅彦（2007）自閉症児における歩行者用信号機のある横断歩道の横断指導 －パソコンとプロジェクタを使ったシュミレーションによる短期集中訓練－　行動分析学会第25回大会発表論文集

南田高典・井上雅彦（2007）行動上の問題を示す発達障害児の担任教師への e-lerning による支援効果　日本特殊教育学会第46回大会発表論文集

福永顕・宮崎光明・井上雅彦(2007)高機能広汎性発達障害者に対する社会参加支援プログラムの検討(1)－支援プログラムの作成を通して－　日本特殊教育学会第46回大会発表論文集

宮崎光明・福永顕・井上雅彦（2007）高機能広汎性発達障害者の対する社会参加支援プログラムの検討(2)－実践事例を通して－　日本特殊教育学会第46回大会発表論文集

犬飼陽子・井上雅彦（2007）早期発達支援機関における発達の気になる子どもへのペアレント・トレーニング－保健所および児童通園施設のスタッフをファシリテータとしたプログラム効果の検討－　日本特殊教育学会第46回大会発表論文集

野村和代・岩岡由香里・井上雅彦（2007）自閉症者における化粧指導－動画や手順シートを用いた化粧スキル形成－　日本特殊教育学会第46回大会発表論文集

岩岡由香里・野村和代・井上雅彦（2007）自閉症者における化粧指導－集中トレーニングによる化粧スキル向上と余暇活動への発展－　日本特殊教育学会第46回大会発表論文集

高階美和・犬飼陽子・井上雅彦（2007）保健センターの親子教室参加者を対象とした発達の気になる子どものペアレント・トレーニング　日本特殊教育学会第46回大会発表論文集

吉池久・井上雅彦（2007）自閉症児の自己活動に対する応答言語行動の形成－視覚プロンプトのフェイデングによる午前・午後におこなった活動の弁別－　日本特殊教育学会第 46 回大会発表論文集

小泉和子・井上雅彦（2007）自閉症児への３コマ漫画によるルール理解の支援－養護学校高等部におけるチームへの取り組み－　日本特殊教育学会第46回大会発表論文集

佐野基雄・宮崎光明・井上雅彦（2007）自閉症児における時刻表の読み方指導と般化－視覚プロンプトによる指導の有効性の検討－　日本特殊教育学会第46回大会発表論文集

酒井美江・宮崎光明・井上雅彦（2007）自閉症児における電話での応答スキル指導－条件性弁別を用いた指導の効果－　日本特殊教育学会第46回大会発表論文集

宮崎光明・酒井美江・井上雅彦（2007）アスペルガー症候群のある中学生に対する社会参加支援プログラムの検討（1）－アセスメントとプログラムの作成－　日本 LD 学会第 16 回大会発表論文集

酒井美江・宮崎光明・井上雅彦（2007）アスペルガー症候群のある中学生に対する社会参加支援プログラムの検討（2）－プログラムの実施とその効果－　日本 LD 学会第 16 回大会発表論文集

吉池久・井上雅彦（2007）特別支援教育における小学校担任と担任補助者との連携についての調査研究　日本LD学会第16回大会発表論文集

古谷奈央・大対香奈子・松見淳子・井上雅彦（2007）グループ遊び場面における小学1年生の提案と共有の行動アセスメント　日本行動療法学会第33回大会発表論文集

佐野基雄・丸本京子・高瀬夏代・野村和代・井上雅彦（2007）アスペルガー症候群のある児童に対する頻尿改善プログラムの検討　日本行動療法学会第33回大会発表論文集

宮崎光明・酒井美江・井上雅彦（2007）高機能広汎性発達障害のある中学生に対する社会参加支援プログラムの検討（1）　日本行動療法学会第33回大会発表論文集

酒井美江・宮崎光明・井上雅彦（2007）高機能広汎性発達障害のある中学生に対する社会参加支援プログラムの検討（2）　日本行動療法学会第33回大会発表論文集

工藤頌子・岩岡由香里・小関俊祐・井上雅彦・佐々木義和（2007）小学生を対象としたSSTにセルフモニタリングを併用することの効果の検討（1）　日本行動療法学会第33回大会発表論文集

岩岡由香里・工藤頌子・小関俊祐・井上雅彦・佐々木義和（2007）小学生を対象としたSSTにセルフモニタリングを併用することの効果の検討（2）　日本行動療法学会第33回大会発表論文集

高木明日香・井上雅彦・筱更冶（2007）発達の気になる子どもの問題行動に対する教師研修の効果（1）－ABC機能分析とストラテジーシート作成による気になる行動の変容－　日本行動療法学会第33回大会発表論文集

森淳子・小関俊祐・加藤美朗・井上雅彦・佐々木和義（2007）応用行動分析チェックリスト教師版作成の試み　日本行動療法学会第33回大会発表論文集

石原広保・井上雅彦・佐々木和義（2007）問題行動に対する「チェック式機能分析シート」の作成の試み　日本行動療法学会第33回大会発表論文集

野邑健二

野邑健二　アスペルガー障害と解離．精神科治療学，22(4)：381－386，2007.

野邑健二　親のメンタルヘルスーうつを中心にー．アスペハート，3：24－28，2008.

Kenji Nomura., Sugiyama Toshiro., Yoshikawa Toru., Kimura Hiroshi., Arai Yasuaki., Tanaka Yuko., Kaneko Hitoshi., Murase Satomi., Honjo Shuji., 2007 August, Psychiatric problems of children in child welfare institutions in Japan. the 13th International Congress of the European Society for Child and Adolescent Psychiatry, florence, Italy.

宮地泰士

Anitha A, Nakamura K, Yamada K, Suda S, Thanseem I, Tsujii M, Iwayama Y, Hattori E, Toyota T, Miyachi T, Iwata Y, Suzuki K, Matsuzaki H, Kawai M, Sekine Y, Tsuchiya K, Sugihara GI, Ouchi Y, Sugiyama T, Koizumi K, Higashida H, Takei N, Yoshikawa T, Mori N. Genetic analyses of Roundabout (ROBO) axon guidance receptors in autism. Am J Med Genet B Neuropsychiatr Genet. 2008 Feb 12;

Toyoda T, Nakamura K, Yamada K, Thanseem I, Anitha A, Suda S, Tsujii M, Iwayama Y, Hattori E, Toyota T, Miyachi T, Iwata Y, Suzuki K, Matsuzaki H, Kawai M, Sekine Y, Tsuchiya K, Sugihara G, Ouchi Y, Sugiyama T, Takei N, Yoshikawa T, Mori N.
SNP analyses of growth factor genes EGF, TGFbeta-1, and HGF reveal haplotypic association of EGF with autism.. Biochem Biophys Res Commun. 2007 Sep 7;360(4):715-20.

Nishimura K, Nakamura K, Anitha A, Yamada K, Tsujii M, Iwayama Y, Hattori E, Toyota T, Takei N, Miyachi T, Iwata Y, Suzuki K, Matsuzaki H, Kawai M, Sekine Y, Tsuchiya K, Sugihara G, Suda S, Ouchi Y, Sugiyama T, Yoshikawa T, Mori N.
Genetic analyses of the brain-derived neurotrophic factor (BDNF) gene in autism. Biochem Biophys Res Commun. 2007 Apr 27;356(1):200-6.

石崎優子、宮島祐、伊藤正利、関口進一郎、深井善光、永井章、宮地泰士.
日本外来小児科学会ならびに日本小児精神神経学会会員の小児に対する向精神薬の処方実態調査の概要報告. 小児の精神と神経. 2007; 47(3): 169-172.

石崎優子、宮島祐、伊藤正利、関口進一郎、深井善光、永井章、宮地泰士.
日本外来小児科学会ならびに日本小児精神神経学会会員の小児に対する向精神薬の処方実態調査の概要報告. 外来小児科. 2007; 10(2): 186-189.

神谷美里・吉橋由香・宮地泰士・辻井正次 広汎性発達障害の行動・情緒的特性の性差－Child Behavior Checklist/4-18 による検討、精神医学:49(10), 1021-1026. 2007

吉橋由香, 宮地泰士, 神谷美里, 永田雅子, 辻井正次 高機能広汎性発達障害児を対象とした「怒りのコントロール」プログラム作成の試み.: 小児の精神と神経 48(1): 59-69. 2008

発達障害を合併したヒスチジン血症児の尿中アミノ酸分析. 鷲見聡, 宮地泰士, 谷合弘子, 今枝正行, 石川道子, 森下秀子: 小児科臨床 61(2): 271-276. 2008

宮地泰士, 辻井正次. 自閉症スペクトラムの早期診断. 脳 21 10(3): 228-231. 2007

宮地泰士, 辻井正次. 協調運動の発達と発達性協調運動障害. 総合リハビリテーション 36(2): 141-145. 2008

自閉症とその関連疾患の診断尺度-ADI-R と ADOS-G について-. 土屋賢治, 稲田尚子, 神尾陽子, 黒田美保, 八木敦子, 松本かおり, 宮地泰士, 河合正好, 中村和彦, 武井教使, 辻井正次, 森則夫: 脳 21 10(3): 223-227 2007.

感情理解および感情のコントロールプログラムの開発. 神谷美里, 宮地泰士, 吉橋由香　, 辻井正次: 脳 21 10(3): 232-236 (2007)

＜学会発表＞

宮地泰士、神谷美里、吉橋由香、辻井正次. 「感情理解プログラム」作成の試み. 第 97 回日本小児精神神経学会. 小児の精神と神経 2007; 47(3): 191-192. 6 月 30 日—7 月 1 日　東京

宮地泰士、石川道子、井口敏之、今枝正行、浅井朋子、水嶋一恵、今橋寿代、作田織江、片岡尚子. 不登校を呈した広汎性発達障害児への対応について. 第 98 回日本小児精神神経学会. 小児の精神と神経 2008; 48(1): 96-97. 2007 年 10 月 26-27 日　栃木

厚生労働科学研究費補助金　　障害保健福祉総合研究事業
発達障害児に対する有効な家族支援サービスの開発と普及の研究

平成１９年度　総括・分担研究報告書

主任研究者　辻井　正次

平成 20（2007）年　3 月 30 日

〒470-0393　　豊田市貝津町床立 101
中京大学　現代社会学部
TEL　0565-46-1260　　Fax　0565-46-1298
E－mail　　mtsujii@sass.chukyo-u.ac.jp